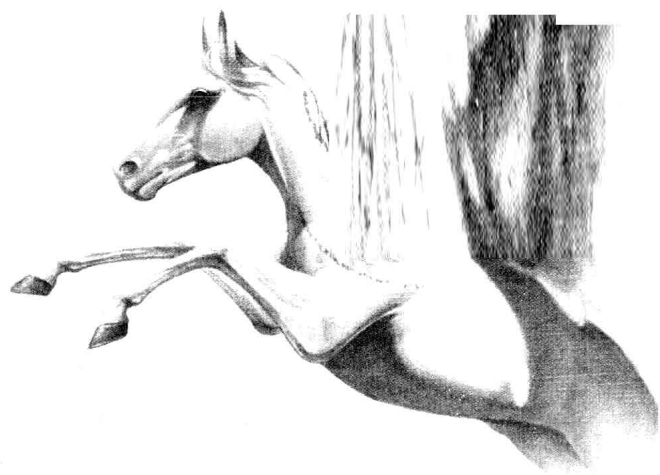


池田大作



アレクサンドロスの
決断



アレクサンドロスの決断 けつだん

一九八七年七月十一日 第一刷発行
一九八七年七月十五日 第二刷発行

池田大作 (いけだ だいさく)

一九二八年東京に生まれる。

創価学会名誉会長、創価学会インタナショナル(SGI)会長。創価大学・創価学園・(財)民主音楽協会・(財)富士美術館・(財)東洋哲学研究所等を創立。国連平和賞受賞。桂冠詩人の称号。ケニア口承文学賞受賞。

主な青少年向け著書に『少年版人間革命』『若き友へ贈る』『少年に語る』『未来をひらく君たちへ』『少年抄』『今日のことば365』『青年の譜』『少年とさくら』『青い海と少年』『お月さまと王女』『雪国の王子さま』『青春抄』『友へ贈る』『太平洋にかける虹』など多数。

著者 池田大作 いけだ だいさく

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

一三 東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

出版部 (〇三)二三〇一六一七一

電話 販売部 (〇三)二三〇一六一七一

製作課 (〇三)二三〇一六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

定価 八八〇円

© DIKEDA, Printed in Japan, 1987

ISBN4-08-783038-1 C0093

著者との了解により検印を廃止いたします。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

はじめに

中学校から高校までが、人間と人生の土台をつくるうえで大切な時期であることはいうまでもない。その若い皆さんに、これから多くの歳月を歩んでいくうえで、少しでも心に触れ、役立つようなことを語りかけられればとの日頃の思いが、二つのささやかな小説となった。

『アレクサンドロスの決断』は、私が若い頃に読んだ『プルトーク英雄伝』に取材したもので、『高校新報』（聖教新聞社）に、昭和六十一年七月から昭和六十二年の三月まで連載した。

ここにとりあげたアレクサンドロスの病室でのエピソードは、文庫本で二十行前後の短章にすぎなかったが、若い私の心には鮮烈な響鳴がいつまでも消えなかった。この場面を借りて、若い日にうけた感銘を基本的なトーンとしながら、アレクサンドロスとフィリップスの人間のきずなを、あれこれと想像してみた。

あわせて、アレクサンドロスの少年時代の恩師であった哲学者アリストテレスの思想のなかでも、高校生の皆さんに大切と思われるものを分かりやすく配して、ストーリーの肉づけとした。

友情とか、幸福とか、自分の進路などについてさまざまに悩むのが高校時代である。いわば人生の門口に立つ皆さんは、それらの問題について大いに考え、また友達の間で語り合っていたきたい。そのための何らかの指標を、この小説からくみとってもらえるなら、との願いをペンに込めたつもりである。

『ヒロシマへの旅』は、昭和六十一年の八月から昭和六十二年の二月にかけて、『中学生文化新聞』（聖教新聞社）に連載したものである。

中学生ならば、原子爆弾のもたらした悲劇は、だれでも聞いたことがあるであろう。

昭和二十年（一九四五）八月六日、広島の上空にひらめいた一瞬の閃光——。それは、人類史上初めての原爆の投下であった。このたった一発の爆弾は、瞬時にして何十万もの人々を地獄のふちへと突き落としたのである。

三日後の八月九日には、二発目の原爆が、今度は長崎の街に落とされた。そこでも、兵士ばかりか、何の罪もない多くの母や子が犠牲となった。

それだけではない。あるとき放射能を浴びた人達は、その後何年も後遺症に苦しみ、そして

亡くなつていった。四十二年たつ今も、なお原爆のもたらした悲劇に苦しんでいる人は大勢いる。

原爆のおそろしさを、人類は身をもつて知つたはずである。ところが、どうだろう。原爆はなくなるどころか、戦後ますます増え続けてきている。核ミサイルは地球上にあふれ、いざ戦争となれば、人類全体を何百回も殺せるだけの量になつてしまった。

今の世界の危険な状態を知つてほしい——。核兵器のおそろしさを、身をもつて感じてほしい——。そう思った思いから、私はこの物語を書いたのである。

原爆の悲劇についてのすぐれた作品は、すでに数多くある。にもかかわらず、あえて筆をとつたのは、時がたつにつれてあの悲しい歴史が、だんだんと忘れ去られていくように思えてならなかつたからである。

だから私は、今の中学生の生活実感とも結びあうようなかたちで、この物語を創り上げようと試みた。

戦争のこわさを知り、平和の尊さを感じ、そして来るべき二十一世紀を核兵器のない世界にしていこう——その私の願いを、この作品から感じとっていただければ、とてもうれしい。

この本には、折にふれての中学生や高校生に対する私のいくつかの詩や講演なども、収めた。二つの小説と同じく若い人々への私なりの期待や励ましを綴つたものである。

なお、『アレクサンドロスの決断』は、聖教新聞社外信部の外川進君が、『ヒロシマへの旅』は、同・学芸部の大橋章悟君が、取材や資料収集に尽力してくれたことを付記しておきたい。

昭和六十二年五月二十三日

池田 人
〆

目次

はじめに……………1

アレクサンドロスの決断……………11

ヒロシマへの旅……………89

青春の指針……………195

詩　メロスの真実……………197

詩 永遠の都…… 204

青春の原点忘るな…… 216

「健康・良識・希望」の門出に…… 230

解説——アレクサンドロス大王の生涯と足跡…… 239

アレクサンドロス大王の年表…… 244

装幀…荒川じんぺい／カバー・本文絵…野原幸夫

アレクサンドロスの決断



池田大作

アレクサンドロスの決断



(一)

人間というものは何故^{なぜ}、大自然のように、もっと雄大に、大らかに生きられないものか。

あたりを真っ赤に染めながら、遙^{はる}か水平線の彼方に壮大な太陽が昇る。

青と白の波間には、幾種類もの鳥が飛び回っていた。地中海が見える部屋の窓際で、一人の多感な青年が、沈痛な面持ちで悩んでいた。

(服^のむべきか、服まぬべきか……)

アレクサンドロスは、迷っていた。この難問は、降ってわいたように起こって、彼の眼前に解答を迫っている。

彼は二十三歳の青年であつた。

この切羽詰^{はちば}まつた事件は、いつときの時間の猶^{やう}予も許されなかった。

どちらを選ぶにしても、人間一人が死ぬかもしれない——いや、たとえ命は救われても、人間にとって命よりも大切なものが打ち滅ぼされるかもしれないのであつた。

彼は、全身の血が逆流するのを覺^{おぼ}えた。

寝台の傍らに、丸い小さなテーブルがある。樫らしい老木を厚く輪切りにしたもので、ちょうど寝台ほどの高さがあった。その上に薬の入った一個のグラスが静かに置かれていた。それは透明な釉薬で仕上げられたのであろう、少し深い小皿のような形をした美しい器であった。その中にどろりとした液体が入っている。彼の目を釘づけにしているのは、その薬液なのである。

旭日の光彩に照らされて、その搾りたての葡萄酒のような液体は深く澄んで光っていた。ところが目覚めるにつれてよく見ると、まるで腐った溜り水のようにどす黒く淀み、てらてらと不気味な色をしているのであった。彼は一瞬、目眩がした。グラスが目の前に次第に拡大され、中にある薬液がまるでどくろのように見えてきた。

彼は、その険しい眼差しを、テーブルの向こう側に突っ立っている男に向けた。その男は、一片の手紙を読み始めたところであった。書き物を持つ両端の手が微かに震えている。その姿を見て、アレクサンドロスは更に動悸が高まっていた。わずか数行の文字は一瞬にして読まれるであろう。そして男は、読み終わると同時に、自分にそのきつい目を向けるにちがいない。それまでの一瞬間しか、決断の時間はないのであった。その間に、アレクサンドロスは彼に語りかけるべき言葉を選んでおかねばならなかった。

最初に発する一言が決定的に重要な意味を帯びてしまうからである。烈しい衝撃の嵐に向か